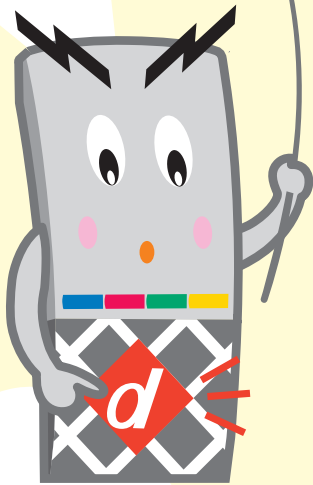


静岡・伊豆下田 KTV 小林テレビ設備 + DataCaster suite メディアキャスト

コバちゃんと 第一歩を踏み出した データ放送

DataCaster suite



コバちゃん、大活躍中

メディアキャストのデータ更新機能と送出機能がセットになったCATV局向けのデータ放送オールインワンシステム「DataCaster suite」を導入し、放送部の板倉千治氏、杉山亮太氏、鈴木美智子氏の3人が業務を分担して運用している。板倉氏は、「KTVは番組サーバーとホームページがあり、そこにデータ放送が加わったので、この3つをリンクさせて一連の流れをつくりたい」という構想を描いている。

そのためには新しく始めた「データ放送」を知ってもらうことが一番と考え、データ放送のキャラクターを誕生させた。愛称「コバちゃん」で、番組に登場することもあるという。全国のデータ放送に詳しいメディアキャストの杉本孝浩代表取締役は「多分初めてじゃないですか」と驚く。さらに茶碗を持ったコバちゃんもある。茶碗 = “お代わり”ということで、それは再放送番組

のこと。名づけて「お代わり番組」と、わかりやすくなった。

また、データ放送に視聴者参加型コンテンツも始めた。「我が家のペット自慢」コーナーで、ケータイで撮った写真を送ってもらいテレビ画面で見ってもらうというもの。ただし、データ放送の容量が限定されるので、「メディアキャストさんにアドバイスをいただきながら、ホームページとの連携を図っています。これも簡単にできるシステムなので助かっています」と鈴木氏。

コバちゃんはコミチャン番組にも登場して、データ放送でフォローしていることも伝えている。というように、リンクするサービスの案内役としてコバちゃんは大活躍だ。

観光業に貢献するデータ放送へ

データ放送の入力作業などでは他のスタッフの手も借りる。「アナログ人間ですが、入力作業はワープロ感覚で、簡単にできます。まだミスはありません」と総務の彦山弘幸課長は胸を張る。放送中に間違いを見つけても、簡単に修正ができるので安心だという。

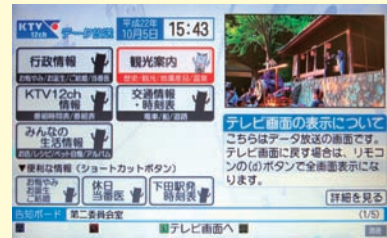
「データ放送は文字と画像だけですが、くり返し何度も見られますので、見逃すことがありません。満足度アップにつながります」と話すのは杉山氏。狭い町のコミチャン番組では誰が映っているかが重要で、動画では尺の関係で人数に限りがある。「データ放送なら1つの画面に数名を出し、次々と切り替えて多くの人に登場してもらえ

伊豆の南端、静岡県下田市に本社を置くKTV(小林テレビ設備有限会社)は、下田市の一部と南伊豆町の一部をサービスエリアとする。局員がたったの6名という小

さなCATV局であるが、2010年3月からコミュニティチャンネル(コミチャン)のデジタル放送化と併

せ、データ放送をスタートさせた。『龍馬伝』効果で賑わいがあるが、ご多分に漏れず過疎化と高齢化で経済低下が重たくのし掛かる。そこでデータ放送を生かして街を強くしたいと願いKTVは動き出した。データ放送システムを納めた株式会社メディアキャストの杉本孝浩代表取締役と、自動送出システムを担当した株式会社ビデオ・テックの平石能敬代表取締役を交え、データ放送の取り組みを聞いた。

(レポート:月刊NEW MEDIA編集部)



トップページ画面

ます。しかもテレビリモコンの操作ですから高齢者も覚えやすいですし」と、データ放送に開眼した様子だ。

さらに、低迷する下田の観光業を活性化するためにデータ放送を活用できないかと考えるKTVは、前職がホテル支配人という大島憲明顧問のアドバイスを受けながら、観光客も使えるコンテンツを準備中だという。コバちゃんがどう登場するか、期待したい。

渡辺良平代表取締役はスタッフのアイデア豊かな取り組みに目を細めながらも、「やりたいことはたくさん出てきます。その中で何を優先させるべきかを考え、ときにはブレーキを踏むことが私の役割です。下田という町を元気にするという目標へ、小さいながらもできることを確実に積み上げていくことが大事だと考えています」と話す。

データ放送を生かす CATVを目指して

「6次産業」を 醸成する データ放送へ

KTV

渡辺良平代表取締役

下田地域はCATVの先駆けですが、現在は過疎高齢化という中で静かに現状維持を継続しています。10年前に6万人だった下田の1市3町は、10年後には4万人で、65歳以上が45%になります。ですから、税収はギリ貧で行政サービスも縮小していかざるを得ません。その中で、KTVはデジタル化をチャンスと考え、民間の立場でチャレンジしていこうと考えています。

一つうれしいことがありました。30回を数える「地方の時代映像祭」のケーブルテレビ部門で番組『我ら海の子三浜の子』が入選したのです。全校生徒28人という小さな小さな小学校の挑戦を取材した番組です。

そして、データ放送も始めました。地域密着で楽しく、元気な生活の足しになることがねらいです。ですが、デジタルはすぐにはマスターできません。データ放送で工夫と訓練をしながら、少しずつバージョンアップしていくことです。

一つの夢があります。地域からの情報発信として放送エリア外にいる伊豆出身者に見てもらえるCATVの枠組みができないかということです。CATV同士がリンクす

れば実現できそうです。私たちのような過疎地域が元気になるためには、「1次×2次×3次の6次産業」という発想が大事です。そのために役立つデータ放送づくりを目指してしていきたいと考えています。

「データ放送は CATVのためにある」 というほどの相性

株式会社メディアキャスト 杉本孝浩代表取締役

データ放送はシステム導入後が勝負です。KTVさんのように導入されたシステムを、導入早々から見事に使いこなしてくれるとうれしい。データ放送は補完的サービスといわれますが、うまく使うことでチャンスにもなります。

データ放送はKTVさんの取り組みからもお気づきいただけると思いますが、通信と融合で見るメディアです。つまり、放送と通信の両方をやっているCATVにとって最適なサービスと言えるのではないのでしょうか。CATVならではの地域情報をテレビに配信できるわけです。冷蔵庫や電話機の周辺に貼ってあるメモ情報を提供できるのです。これはCATVでしかできないことです。

データ放送はあくまでもツールで、どう生かしていくかが重要です。メディアキャストはシステム導入後のサポートに力を入れており、お客様がデータ放送を使って目

的である地域貢献、地域の利便性、デジタルデバイス解消などを達成いただくために一緒に考えていくことを大事にしています。

「百局あれば百の運用形態 があつていい」のが CATVデータ放送

株式会社ビデオ・テック 平石能敬代表取締役

CATVが百局あれば百の運用形態があります。それこそが個性ですし、差別化です。データ放送の運用は、小人数スタッフのCATVにとってハードルが高いものです。ですから、KTVさんがデータ放送をやるに聞いたときには驚きました。

特に伊豆エリアはCATVがなければテレビ放送が受信できない難視地域ですし、CATVは欠かせないものになっています。また観光地という地域産業を考えると、観光客に向けたデータ放送での情報案内もアイデアの一つでしょう。その場合、ホテルや旅館には情報の更新性よりも地元ならではの案内情報が喜ばれると思います。地域住民には日替わりで新鮮な情報を提供するという運用上の工夫が必要でしょう。ここあたり、コバちゃんに期待しましょう(笑)。

KTVさんはデータ放送を「使える」、つまり視聴者が活用できることの大事さに気づかれています。スタート後の半年間でこれだけの進化をさせた熱意とアイデアに驚くとともに感動しています。

